



第1回 幕末のゆるかわ武士・尾崎石城と過ごす忍藩の日常

20年ほど前に出会った幕末武士の「石城日記」の感動が忘れられず、日記に書かれている場所をぶらりします。筆者の「尾崎石城」と聞いても、すぐにはどんな人物なのか思い浮かぶ人は少ないかもしれません。幕末の有名な人といえば、勝海舟や西郷隆盛、新選組などがまず思い浮かびます。しかし、「尾崎石城」はそうした歴史の表舞台に立った人物ではありません。石城さんは忍藩の下級武士です。

ところが、この人が残した「石城日記」が、とてもおもしろい。毎日のように寺に行き酒を飲み、友人と話をし、料理をし、絵を描き、読書をし、姪をかわいがる様子を絵日記に描いているのが「石城日記」です。原本は、慶應義塾大学文学部古文書室にて一般公開されていますので、ご覧下さい。

<https://krmj.flet.keio.ac.jp/exhibition/2013/04.html#view>

今日は、その石城さんが暮らした名残を感じるぶらりです。

歴史散歩行田かわら版

発行所：工房えびはら
編集室：多門寺工房
atelier EBIHARA



石城さんが暮らした忍藩は、現在の行田市です。江戸から北へ約60キロほど離れた城下町で、忍城を中心に発展していました。忍藩は幕府を支える親藩で、松平信綱(知恵伊豆)や阿部忠秋など多くの老中を輩出したことから「老中の藩」とも呼ばれていました。そんな忍藩で、石城さんはもともと100石ほどの中級武士でした。ところが、石城の人生は途中から大きく変わります。

安政4年、29歳のころ、石城さんは忍藩の重役「上書」を提出し、藩政について自分の意見を述べました。何を書いたのかは、詳しく分かりませんが、日記には水戸浪士に共鳴する記述があり、尊王攘夷の思想を持っていたと考えられます。「こころ、忍藩という立場が重要になります。忍藩は幕府を支える側の藩でした。一方、石城さんが共鳴していたと考えられる水戸の思想は、幕府に対して敵しいものでした。石城さんは、自分の考えを持っていたからこそ、藩の方針とぶつかっていました。た可能性があるので、その結果、塾居を命じられ、100石ほどあった身分から10人扶持の下級武士へと大きく待遇を下げられました。現代なら、会社を辞めて別の仕事を探すこともできますが、当時の武士には身分があり、勝手に藩を出ることもできません。石城さんは、かなり厳しいところまで追い込まれたのです。それでも、この人は意外なほど元氣です。

では、石城さんが毎日のように通った場所へ向かいましょう。

【大蔵寺へ向かいます】

石城さんは、このお寺に何度も足を運んでいます。ただし、「お寺だからお参り」というわけではありません。



せん。和尚と話をし、酒を飲みます。「石城日記」には、石城さんが大蔵寺、龍源寺、清善寺、長徳寺という四つの寺と親しく付き合っていたことが詳細に記されています。

さあ、「こころ」で想像してみよう。幕末の忍の町を、一人の下級武士が歩いています。家を出て、寺へ向かいます。寺に着くと、和尚がいます。「おつ、石城さん、来たか」そんな会話がもたらされたかもしれません。そして酒宴が始まります。現代の私たちがすると、「お寺で酒を飲むのですか」と少し驚きます。しかし、石城さんの時代のお寺は、信仰だけの場所ではありませんでした。武士や町人が集まり、酒宴をしたり、さまざまな催しを行ったりする場所でもありました。

石城さんは和尚たちと中国の故事や歌舞伎の話をしたり、淨瑠璃を楽しんだりしています。

つまり、お寺は当時の「文化サロン」のような役割も果たしていたのです。

【龍源寺へ歩いてみましょう】

では、大蔵寺から龍源寺へ向かうつ

もので歩いてみましょう。残念ながら、龍源寺は現在に残っていません。明治時代の廃仏毀釈によって廃寺になりました。

でも、「石城日記」を読むと、「こころ」は確かに人々の生活がありました。

ある夜、石城さんは龍源寺を訪ねています。持っていたのは、さくら漬けです。そして和尚と夜10時過ぎまで語り合いました。夕食は、酒、焼き貝、いじみ汁です。「こころ」。

少し石城さんが身近になってきました。幕末の武士と聞くと、刀を差して難しい顔をしている人物を想像してしまいます。

ところが石城さんは、夜の寺で和尚と酒を飲みながら、いろいろな話をしているのです。政治の話もしたでしょう。世の中の話もしたでしょう。歌舞伎や文学の話もしたでしょう。そして、くだらない話をして笑ったこともあったかもしれません。

「石城日記」のおもしろさは、「こころ」に記録に残りにくい「時間」が残っていることです。

【長徳寺で、人の優しさを感じる】

次は長徳寺です。「こころ」には残っていません。しかし、「石城日記」には、この寺をめぐる心温まる出来事が記録されています。長徳寺の和尚が病気になるたきのことです。長徳寺には弟子がおらず、身の回りの世話をする人もいませんでした。そこで、遍照院の和尚、龍源寺の和尚、そして石城さんたちが相談します。

「このままでは大変だ。龍源寺で引き取る」として和尚を助けることを決めたのです。幸い、その後、和尚の病気は良くなり、龍源寺へ移る必要はなくなりました。石城さんはそれを知って安心しました。この出来事で注目したいのは、石城さんが「自分は一人ではない」と感じていたことです。資料にも、その幸せを感じたことが記されています。

【清善寺では、少し「ぎやう」】

もう一つ、石城さんと関係の深かった寺が清善寺です。「石城日記」には、清善寺で何らかの集まりがあり、石城さんたちは酒を楽しみ、歌ったり踊ったりしていたことが記されています。「こころ」まで来ると、石城さんの日常がかなり見えてきます。別の日には読書を読みます。「この人、本当に忙しかろうな、暇なのか、よく分かります。でも、そこが石城さんの魅力なのですよ。」

「石城さんの食卓をのぞいてみましょう」

石城さんは10人扶持の下級武士でしたから、毎日の食事は決して豪華ではありません。朝は「みれ汁」や豆腐汁。昼は豆腐や茄子漬け。夜は豆腐や目刺し。三食お茶漬けの日もあり、夜はお茶だけという日もありました。ところが、友人が集まると話が変わります。刺身、ぬた、焼き魚、蓮根、豆腐田楽などが並びます。友人が食材を持ってくる、みんなが料理することもありました。

そして、妹の邦子とは、ちらし寿司まで作っています。忍藩の東照宮の祝いに、卵、すめ、椎茸、海苔、落、蓮根、かんぴょう、ウド、タケノコ、鮭など、たくさんのお魚を用意しています。石城さんが酢飯を混ぜ、妹が団扇であおぎます。幕末の武士の家で、男が大きな飯を混ぜています。横では妹が団扇をあおいでいます。そこには政治もありません。幕府もありません。ただ、家族と一緒に料理を作る時間があります。これもまた、歴史なのです。政治的には藩とぶつかり、謹慎まで受けた石城さんですが、家庭では姪をかわいがる普通の叔父でした。この落差が、石城さんという人物の面白さだと思います。

【そして明治へ】

「石城日記」が終わった後、日本は大きく変わります。江戸幕府が終わり、明治維新を迎えます。幕末には忍藩から処分された石城でしたが、明治になると、今度はその才能が認められます。現在の忍小学校がある場所



所に建てられた藩校「培根堂」で、石城は教頭に抜擢されました。その後は宮城県にも招かれ、大主典を務めたと資料にあります。そして、明治8年「こころ」47歳で亡くなったとされています。最初は、政治的な意見を述べて処分された一人の武士でしたが、その人は絵を描き、読書をし、子どもを教え、寺へ行き、酒を飲み、料理をし、家族を大切に、たくさんの人と付き合っていました。そして新しい時代になると、その才能を評価されました。石城さんが残してくれた絵日記のおかげで、私たちはその幕末武士の「普通の一日」を知ることが出来ます。

現在の忍城周辺を歩くと、150年以上前のどこからか、和尚と石城さんの笑い声が聞こえてくるかもしれません。映画やドラマには登場しない本当の武士に石城さんを通して会っているような忍藩のぶらりでした。

写真は、上から現在の忍城、大蔵寺、行田市内で一番有名なゼリーフライのお店です。

次回からは、「歴史が時を超えて歴史の人物への取材(生成AI活用)をスタートします」。最初は石城さん(文久元年・1861年6月)にインタビューしていきます。

(共栄大学客員教授 海老原)